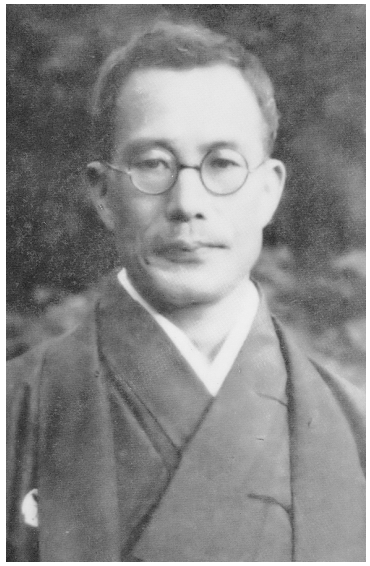
鹿子木員信

本誌編集長 坪内隆彦

戦闘的人生観を固める

大東亜戦争中、アジア解放のスローガンが官民挙げて声高に叫ばれたが、この時代は理想を追い求める在野の興亜論者と現実主義に徹する国家指導者の矛盾が深まった時代でもある。今回取り上げる鹿子木員信（かのこぎかずのぶ）は、この矛盾の時代に大日本言論報国会専務理事を務めた。その間、彼の理想は維持されていたのだろうか。



鹿子木員信は、旧肥後藩鹿子木才七の三男として、明治十七年十一月三日に、甲府で生まれた。十二歳のとき東京の中学校に入学、十七歳で海軍機関学校に入った。この時代、彼はトーマス・カーライルや内村鑑三の著作を読み、やがてキリスト教徒になった。

明治三十七年二月に海軍機関学校を卒業した直後、日露戦争が勃発する。彼は同年八月十日、巡洋艦八雲で戦闘に参加している。戦争終決後、哲学的関心を強めた鹿子木は、海軍を去り、京都帝国大学に入学、哲学を本格的に学びはじめる。鹿子木が軍籍を脱することに家族は皆反対していた。このとき、鹿子木の心情を察し、独り彼の決断を支持したのが、恋人の石倉芳子であった。芳子は女子英学塾（津田塾大学の前身）時代に、徳富蘆花夫妻の知遇を得ていた。やがて、二人は結婚を考えるようになったが、鹿子木家、石倉家ともに結婚には反対していた。その説得を買って出たのが、蘆花夫妻であった。

哲学へ傾倒していった鹿子木は、明治四十年秋、宗教哲学と神学を学ぶために、アメリカに渡り、ニューヨークのユニオン神学校に入学する。一年後にはコロンビア大学に入学、カントとニーチェの研究を深めた。

明治四十二年夏、芳子は鹿子木を追って渡米する。その際、蘆花は芳子の渡米に反対していた芳子の父庄作を説得するため、度々石倉家を訪問していたという。

無事ニューヨークに到着した芳子は、看護学校に入って熱心に勉強した。ところが明治四十三年一月末、芳子は鹿子木と結婚することなく、敗血症と腸炎を併発して急死してしまう。芳子の悲劇は、蘆花にとって忘れ難い出来事だった。後に彼は、「梅一輪」と題して二人の恋愛を描いた。

鹿子木は、芳子の人生に「戦い」を感じとった。その心情こそ、鹿子木の戦闘的人生観の根底にあったものに違いない。そして、宮本盛太郎が指摘する通り、鹿子木は、大正五年五月に亡くなった母歌子の生きざまを受け継いでいた。彼は、母歌子について次のように書き残している。

「翻って彼女の一生を顧るに之れを一貫せる精神は実に不屈不撓向上健闘の精神なりき……彼女の精神を一貫して生けるものは実に峻厳苦闘の武士的精神なりき、武士の家に生れ武士の家に嫁ぎ武士の精神に生ける彼女は又その武士的精神を其子女の魂に残して逝きし也」（『宗教的人間の政治思想』木鐸社、昭和五十九年、八十一頁）。

やがて鹿子木は大正六年に刊行した『戦闘的人生観』において、「蓋し、戦闘的人生観は、実に余の魂の流の姿、実にその表現に外ならぬ」と書くに至った。

哲人の理想と反アングロ・サクソンの戦い

欧米で哲学の研究を深めた鹿子木は、独自の文明観を抱くようになっていた。

彼は、大正二年に慶応義塾大学で「文明と哲学」と題して十回の連続講演を行っている。ソクラテス、プラトン、スピノザ、カント、ニーチェなどの哲学について説明した上で、最終回「結論―文明の理想」において、次のように語っている。

「……哲学的文明、精神絶対の優越は、一切文明段階の究極、その目的、その理想でなければなりませぬ。……一切文明階段の指す所、『文明の理想』は実に『哲人の理想』でなければなりませぬ。……此の理想、此の哲人の理想、以て文明幾千年の未来を照らす可きであります」（『文明と哲学的精神』大正四年、三百五十、三百五十一頁）

彼の思想の根底には、正義実現のための哲人政治の理想があったのである。

彼は、大正三年に慶応義塾大学教授に就任、大正七年三月に退職すると、インドへと旅立った。この時、彼はイギリス統治下のインドの惨状から、世界的不正義の具体的姿を目の当たりにしたのである。

彼は、ネパール東部とインド国境にあるシッキム・ヒマラヤの主峰カンチェンジュンガを踏査し、大正八年一月四日には仏跡巡礼の旅に出た。ところが、二月二十二日に彼はイギリス官憲に逮捕され、インドから追放され、シンガポールの牢獄へ送還されてしまったのである。実はヒマラヤ同行者の中にイギリス官憲のスパイが潜伏し、鹿子木の反英的な言動

は記録されていたのである。この体験によって、鹿子木のイギリスに対する反発はさらに強まった。

大正八年四月十三日、彼は時局研究会で、このインド体験を語った。同年六月五月には、満川亀太郎が世話人を務める思想サロン「老壮会」の会合で、世界革命論について話をした。鹿子木の世界革命論は、大正十一年に彼が著した『ガンジと真理の把持』にある、次の一説に集約されている。

「今日、世界は一つである。而して、そは単に一つなる世界ではない。そは実に統一せられたる世界である。そは即ち、その根底に於て、利己主義支配の世界である。経済的には、資本主義的世界である。而して政治的には、アングロ・サクソン世界支配の世界である。而して凡て此等の原則、此等の主義、此等の権力は、その起源上、近世ヨウロッパ白人の集団に基が故に、そは、白人支配の世界である」(『ガンジと真理の把持』改造社、大正十一年、三百五十頁)

そして鹿子木は、世界革命の目的を「利己主義、近世資本主義、アングロ・サクソン的帝国主義、及び白人閥の倒壊」と明確に指摘したのである。すでにこのとき、鹿子木にとっては、日露戦争に勝利し、白人支配の秩序に一撃を与えた我が国が「偉大なる革命的勢力」として認識されるとともに、アングロ・サクソンの支配に挑戦するドイツが世界革命の一躍を担う存在として意識されていた(前掲書、三百五十六頁)。

満川は、『三国干渉以後』で、鹿子木が老壮会で話した世界革命論は「最も出色のものであつた」と特筆している。

岸信介も参加していた東京帝国大学「日の会」

鹿子木は大正十年に東京帝国大学に提出した論文「プラトン哲学の研究」で文学博士の学位を取得、同大文学部哲学科の講師に就任する。鹿子木の講義を受けた哲学者の古在由重は、「あるロマンティストの路—鹿子木員信のこと」(『思想とは何か』収録)において、熱心にプラトン哲学を講じる当時の鹿子木の姿を活写している。

この時代に、鹿子木は大川周明らの民族派との関係を強めていた。当時、彼らの動向は、むしろ体制側の警戒するところであった。大正十一年十一月二十一日に、警視総監から外務省亜細亜局長宛てに発信された機密文書は、大正九年五月(大正十年説もあり)に鹿子木が大川らとともに結成した東京帝大「日の会」と、亡命インド人の関わりについて報告している。

大正八年八月には、満川亀太郎や大川周明らの主導で猶存社が設立され、各大学にも民族派組織が設けられていった。拓殖大学「魂の会」、早稲田大学「潮の会」、慶応大学「光の会」などである。その先駆けとなったのが、「日の会」であり、そこには鹿子木の思想的影響が色濃く表れていた。「日の会」宣言は、次のように謳っている。

「我らの魂は無限の洗練、向深、発展、無限の探検——永遠の戦いの上に生く。

『我』が在るは戦による。生くるとは実に闘うことである。我らは「我」の存在の戦士である。

しかるに絶対の真理、最高の自由はあらためて実に『我』のうちにある。(中略)現在の世界は実に横暴老猾なる利己主義的民族の支配の下に在る。我らの剣、我らの鉄槌は人類を縛して利己主義壇上の犠牲たらしむる彼らの鉄鎖を裁断粉砕するまでは憩うの日がないであろう。人類の戦士たる我らは必然戦士日本である。戦士日本のその強靭鋭利なる日本の剣を揮う処、そこに世界革命の火花は散らざるを得ぬ」

この宣言は、鹿子木の戦闘的人生観が維新派、興亜派の思想に大きな影響を与えていたことを物語っている。「日の会」に参加した学生の中には、岸信介や三浦一雄らがいた。彼らは、上杉慎吉の指導を受けていたが、東京帝国大学助教授・森戸辰男の筆禍事件を契機に、上杉と距離を置き、鹿子木や大川を指導者として迎えたのである。岸は、後に次のように振り返っている。

「私の思想にいろんな面に影響を持っているのはやはり鹿子木博士です。当時、鹿子木さんは鎌倉の禅寺に住んでいたが、私達は時々そこへ訪れていって話を聞いた。…人間的な影響力というものも、鹿子木さんから受けたものが非常に多いと思うのです」(『昭和動乱期の回想—中谷武世回顧録　上』泰流社、平成元年、十一頁)

神兵隊を支持した鹿子木員信

鹿子木は、大正十二年三月にドイツなどのヨーロッパに哲学研究のために赴いた。同年夏にはドイツのマールブルヒ大学でニコライ・ハルトマンやハイデッガーの講義を聴講している。

ドイツ滞在中、鹿子木は特別の任務を帯びていた。ドイツの親日外交官だったゾルフ大使、後藤新平らの依頼を受け、日独文化交換事業を推進することであった。その成果の一つが、ベルリンの旧王城内に設立された日本学会である。これらの任務を終えて、鹿子木は大正十五年七月に帰国、その後も後藤や文部当局の指導の下、東京の日独文化協会設立に携わった。

これらの任務を通じ、鹿子木はドイツを介して日本文化の価値を世界に宣伝することを強く意識するようになっていた。ただ、従来彼はヨーロッパ哲学の研究に専念してきたので、日本文化の専門家ではなかった。そこで彼は、日本文化の研究に邁進していったのである。その際、彼に強い影響を与えていたのが、かねてより深い関係にあった蘆花の兄徳富蘇峰(猪一郎)である。鹿子木は、昭和二年二月蘇峰に宛てた手紙で次のように書いていた。

「私は従来、日本の学問と文化に対しては、多分門外漢でありました。熱烈な興味と愛着を感じながら自分の所詮専門

学の拘束を受けてその方は手を延ばす余裕がなかったのです。がこの度此の機会を利用して出来るだけ沈潜して見るつもりです。而して此の研究の範囲において導者として仰ぎ得る者は先生をおいて他にありませぬ」（葉照子「第一次大戦後の日独関係修復過程における文化交流史的一側面―鹿子木員信をめぐって」『九州ドイツ文学』平成十年、五十二頁）

日本精神への理解を深めた鹿子木は、昭和二年四月、再びベルリンへ赴き、昭和四年まで日本協会の運営に当たった。またベルリン大学学賓教授として、日本精神の闡明と宣伝とに没頭した。

昭和四年四月に帰国した鹿子木は九州帝国大学教授に就任し、以来昭和十四年まで十年間務めた。昭和七年二月から一年間は法文学部長を務めている。

ドイツにおいてナチス運動の台頭を観察した鹿子木は、日本の維新のためには、民族的革新政党を樹立する必要があると痛感していた。一方、昭和二年秋には「日の会」の門下中谷武世が、満川亀太郎、綾川武治、天野辰夫、渥美勝らと全日本興国同志会を設立していた。やがて、中谷と天野は、興国同志会のさらなる発展のために、有力指導者を据える必要性を感じるようになった。両者は鹿子木こそ適役だと確信し、昭和四年秋、九州帝大に鹿子木を訪ねたのである。鹿子木は帝国大学教授という立場の制約を認識していたが、中谷らの熱意に絆され、顧問の立場で参画することを決めたのである。

その際、鹿子木は、民族派の政党樹立の必要性を中谷と天野に語った（『昭和動乱期の回想　上』二百十九、二百二十頁）。

この助言を受けて、興国同志会を基盤として政党組織を編成しようとの機運が高まり、昭和五年二月に愛国勤労党が結成される。興国同志会とともに、高畠素之系の矢部周、神永文三、小栗慶太郎、津久井竜雄らも参加し、鹿子木は下中弥三郎、満川亀太郎らとともに顧問に就いた。その綱領は、「吾党は天皇と国民大衆の間に介在する一切の不当なる中間勢力を排撃し、一君万民君民一家の大義に基き、搾取なき国家の建設を期す」と謳った。

同党の思想的立場には、日本精神を強調する鹿子木や天野の思想が強く反映されているように見える。鹿子木は、人間の行い、精神の行いを、出来事から区別して「出かし事」と呼び、日本の歴史は、日本の出かし事であり、日本の出かし事の主体は大和心、日本精神であると強調している。

鹿子木はまた、『皇国学大綱』において、天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、高御産巣日神（たかみむすびのかみ）、神産巣日神（かみむすびのかみ）の根源にある「生みそのもの」の考察から、日本的世界観の根源は「生産」だとし、日本民族にとって真の秩序原理は、機械的物質的因果原理などに基づいて作られる秩序ではなく、「生み」に基づいて生り出づる秩序だと説いていた（『皇国学大綱』同文書院、昭和十六年、百一頁）。

一方、天野は古事記、日本書紀の研究に基づいて皇道原理を前面に打ち出した維新の断行を訴えていた。五・一五事件から一年あまり経った昭和八年七月、天野は前田虎雄ら愛国勤労党の急進派、鈴木善一ら大日本生産党系の維新派とともに、昭和皇道維新の断行を目指して神兵隊事件を企てた。決起直前に検挙され、未遂に終わったものの、鹿子木は神兵隊の志を高く評価していた。彼は、神兵隊事件において初めて純乎として純なる皇国の国体原理に基づく、日本的な維新が企図されたと述べている。ちなみに、鹿子木は二・二六事件には厳しい評価を下していた。彼は、北一輝の国家改造原理に、ルソー流の直接民主主義思想をかぎ取り、その思想の鵺性が原因となって、北らの行動は尊皇に始まり叛逆に終わったと断じていた（『宗教的人間の政治思想』二百九十五頁）。

東條体制下の葛藤

鹿子木は昭和十四年三月二十八日、国民精神総動員委員会委員に就き、開戦後の昭和十七年末には大日本言論報国会専務理事・事務局長に就いた。体制の一躍を担う立場に立ったのである。経済学者の大熊信行は、鹿子木が言論報国会専務理事に就いたとたんに、「読売紙上『第一線』欄のかれの革新的な主張にぱったり終止符がうたれ、そして毒にも薬にもならないような観念的な教説が、それに代わった」と振り返る（大熊信行「大日本言論報国会の異常性格」『文学』昭和三十六年八月、四頁）。彼は体制の御用学者として戦時下を生きたかに見える。しかし、事実はそれほど単純ではない。

この間、鹿子木が高く評価した神兵隊は、昭和十一年に分裂していた。神兵隊決起を前に永井了吉を排除した前田虎雄が、同志の了解なく永井と手を結んだことに、天野が反発したためだ。結局、片岡駿、中村武彦、毛呂清輝（もろ）らが天野を支持し、彼らは「告（の）り直し」と称して神兵隊の新たな発足を宣言した。実動機関として昭和十二年七月に設立されたのが維新公論社である。鹿子木は、維新公論社の活動を指導、支援し続けた。『維新公論』は、毎号のように発禁の弾圧下にあったが、それでも自らの立場を顧みず、鹿子木は同誌に積極的に執筆していたのである。中村武彦は、鹿子木の「清廉なる人格、烈々の気魄、耿々の志、深遠なる学識、威厳と温情」に感謝し、自らが主張した日本歴史の展開をやまと心の理想の実現として説明する史観は、全く鹿子木の教えに基づくものであった振り返っている（前掲書、二百四十三、二百四頁）。

中村が鹿子木と出会ったのは、昭和十一年一月だが、もともと中村は、鹿子木の九州帝大での同志同僚であった河村幹雄の指導を受けていたので、親近感を抱いていたという（前掲書、二百一頁）。これらの事実は中村が残した手記「鹿子木員信先生に捧ぐる追憶と思慕」（昭和二十五年）に克明に書かれている。

昭和十三年三月には、五・一五事件に連座した本間憲一郎と天野らが合流して「勤皇まことむすび」が設立されている。

「勤皇まことむすび」は、鹿子木と全く同様に、親英恐米派の排撃を強調し、中野正剛の東方会とともに、日独伊三国同盟支持の立場を鮮明にしていく。

鹿子木は天野、中村らの運動を支援し続けていたのである。維新公論社、勤皇まことむすびが厳しい弾圧を受けると、自ら『維新公論』『まことむすび』の編纂にあたったほどである。しかし、昭和十八年十月二十一日には、東條政権打倒を企てたとして天野、片岡、中村らは検挙された。

結局は、官製的御用運動的な拘束を受けざるを得なかったが、鹿子木には政府や軍の走狗を務める意志などなかった。東條政権の欠陥を認めつつも、その打倒に動くことによって敵に乗ぜられるおそれがあるとして、内面から改善していく道を選んだのである。

興亜の理想体現のための苦闘と挫折

鹿子木は昭和八年三月に発足した大亜細亜協会では理事として精力的に活動している。彼は、現地に赴き、アジアの厳しい現状を踏まえて、独自の政策論を唱えた。昭和十二年に刊行した『すめらあじあ』では、次のように主張している。

「云ふまでもなく亜細亜は、決して皇国日本の生みの親では無い。若し強いてこれを名づくべくんば、そは寧ろ乳母とも云ふべきもの。しかも、善かれ悪かれ、日本は、過ぐる二千年の久しき、主としてこの亜細亜に抱かれはぐゝまれて生ひ立ち来れるものである。……日本の世界史的使命遂行の第一歩は、実に、その揺籃にしてまたその乳母たりし亜細亜に対する『報恩』の行に存する」（鹿子木員信『すめらあじあ』同文書院、昭和十二年、十一、十二頁）

そして彼は、国際連盟、アメリカ、イギリス、ロシアなど欧米の全アジア簒奪の危機に直面し、神聖亜細亜の独立と自由とを擁護回復する唯一の道は、一日も早く全亜細亜連盟を結成することだと主張した。彼は、「日本精神は、『有る』世界に囚はるゝ支那精神、『無き』世界に溺るゝ印度精神の両極を統一把持する綜合亜細亜の精神だ」とも書いている。

彼は、アングロ・サクソンが支配する国際秩序の打破と、アジア解放を願った。しかし、彼はそうした日本の興亜陣営の理想に中国側が背を向けていると判断せざるを得なかった。彼は、国民党政府の排日主義こそが、アジアの興起の障害になっていると批判するだけではなく、孫文の三民主義に対しても批判的姿勢を強めた。孫文の大亜細亜主義演説に関しても、ソビエト・ロシアを中核として、中国がこれと結び、日本がそれを擁護するという構図であり、「日本を赤化亜細亜の番犬たらしめんとする」意図だと痛烈に批判した。

こうして、彼は全亜細亜連盟を主導するのは、日本しかないとの考え方を強め、「克き闇き亜細亜に光を齎らし、克く混沌としてたゞよへる亜細亜に秩序を与へて、これに明確なる独立の姿と誇を付与し得るもの、『皇国日本』を除いては絶無だ。大亜細亜主義唯一の遂行者は、実に、日本の自覚に基づく皇国主義あるのみだ」とさえ書くに至る（前掲書、百二十六、三百八十三頁）。

残念ながら、日中の戦争が拡大する中で、彼の理想は遠のいていった。日本の指導層、軍人は、必ずしも彼が期待したように肇国の精神に則って行動しなかった。鹿子木は、昭和十二年末には陸軍省から北支方面軍司令部付を命じられ、翌年一月から同年七月まで滞在していた。このときの状況について、中村武彦は次のように書いている。

「招かれて北支派遣軍最高顧問として赴任された処、思想文化の何たるかを解せずしかも軍刀を鳴らして思想文化に容赦干渉し来る軍司令部の傲慢無知と正面衝突し、ホトホト愛想を尽かし、憤然引揚げて来られたところでした。……先生の口を衝いて出る今次事変の意義と、之を蹂躙する中央現地軍人官僚の無知腐敗振りに対する憤慨は、先生の体験から迸るだけに痛烈骨に刺すものがありました」（『宗教的人間の政治思想』二百四頁）

鹿子木が支援した『維新公論』

結局、鹿子木の興亜の理想は貫徹されることなく、大東亜戦争は終結した。鹿子木は、昭和二十年九月二十四日、A級戦犯として巣鴨に拘置された。彼は、国体の理想の普遍性を占領当局に理解させようと試みた。拘置所付のチャプレイン・スコットと知り合ったのを契機に、英文論文において、アマテラスの政治形態が民主主義的であり、キリスト教とも矛盾しないことを英文で主張し、その論文をマッカーサー司令部の当局者に提示してほしいと委ねていたのである。

鹿子木は昭和二十二年九月に釈放された。中村武彦の手記によると、戦後も「すめらみくに」の国体が永遠の真理であり万邦に無比なるものだとの鹿子木の信念はいささかも動揺しなかった。ただ、このことを説明する従来の国体論の論法が独善主義・排他主義・超越主義・神秘主義の傾向に偏して、かえって、その世界的な普遍性と合理性を見失い、軍閥官僚の強権独裁政治に利用される結果に堕したことを反省していた（前掲書、二百六十八頁）。

鹿子木は、昭和二十三年元旦からプラトンの国体篇の翻訳を開始した。プラトンの説く哲人政治の理想は人類永遠の憧憬であり、日本の国体観、天皇政治の理想に通ずるものがあると考えていた鹿子木は、最後の力をふり絞って国体の理想を究める戦いを挑もうとしたに違いない。同年末には第五巻まで訳了、第六巻に着手したが、病気のため中断を余儀なくされた。その一年後の昭和二十四年十二月二十三日、正義の貫徹を目指した鹿子木の戦闘的人生は幕を閉じた。

（敬称略）